

第208回 「元気に百歳」クラブ「道草」(第17回通信句会)開催

「ロシアのウクライナ侵攻」、「コロナウイルス感染拡大」の現状は、毎日の新聞、テレビが報ずるとおり、相変わらず私たちの脳細胞を曇らせています。せめて七分目くらいでも良いので、スッキリした気持ちで居させて欲しいと思うのですが、残念ながらそれは叶いません。ただ、私たちには「俳句を楽しむ時間」があります。とても有難いことだと思います。

今月、提示して下さった兼題は次の通りです。

兼題1「桜」、兼題2「轉」、兼題3「当季雑詠」

平素、俳句を詠むときは、「兼題として提示された季語の本意を把握して臨むこと。本来、季語の持っている意味を知り、これを句の主人公にして詠み込むこと」と教わってきました。また別のところでは、「俳句の豊かさとは、詠む句の中で、季語の本意がしっかりと活かされていること」とも聞かされましたが、これも同じことを言っているように思えます。「言葉を使おうとするな、上手く表現しようとするな、先ず目前のものをじっと見ていれば、言葉はそこから出てくる」という教えもあります。芭蕉のいう「もの見えたる光」とは、この光を自分のものとして句の中に活かすことにあるのだと思います。私たちの願いは、句の中で季語が、溢れ出てくるように活かされていることだと思います。季語とものの関係は、どうやらその辺りにあるように思うのです。

4月の句会に参加された方々は次の通り、芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然の17名でした。

皆さんが詠んで下さり、選んで下さった、今月の優秀句です。皆さんの「天賞推挙のコメント」も、「投句に対するひと言」も、俳句に対する考え方が披歴されているのでしょうか。引き続き「有益なコメント欄」にしていきたいですね。この句会記録を読んだ後でも、さらに気が付く反省点が出てきましたら、また、このHPをご高覧いただいた方が、お気づきになられたことがございましたら、是非ともご一報下さいますようお願い申し上げます。

兼題1. 「桜」

◎『子ら駆ける桜吹雪に手をかざし』	月草	天1
◎『ゆつたりと刻が過ぎゆき桜舞う』	明峰	天1
◎『山桜まだ見残こせしわが山河』	晶如	天1
◎『止み給へ花散らす雨今日もまた』	歌多音	天1
◎『もう少し話をしたし夕桜』	多佳	天1
◎『修道の門を彩る桜花』	柴楽	天1
◎『桜しべ降りつぐ幹の乾きみて』	荻女	天1
◎『若木には負けじと老いし桜咲く』	憧岳	☆7

兼題2. 「轉」

◎『轉やひとりの刻を野に過ごす』	明峰	天1
◎『さえずりや散歩日和と告げる朝』	蒼樹	☆9

兼題3. 当季雑詠句

◎『車椅子笑顔を乗せて花見かな』	創風	天3
◎『好きな道好きに歩いて春探す』	明峰	天2☆9
◎『春嵐ひと葉を窓に貼り付けて』	晶如	天1
◎『新幹線春色の靄突き抜けり』	栄女	天1
◎『郁子の花日ごとに命増すごとし』	蒼樹	天1
◎『タンポポの真似して仰ぐ空真青』	月草	天1

兼題1では、月草さんの句「子ら駆ける桜吹雪に手をかざし」が、天賞一つを獲得しました。子らが桜吹雪が舞う情景に興奮し、自分も花びらになって走り回る。降る花びらを掌で受け止めようと花びらを追う。そんな子供たちの姿が、読者の脳裡に描き出されたのでしょうか。そのシーンに選者は一票を投じました。次に明峰さんの句「ゆったりと刻が過ぎゆき桜舞う」が、天賞一つを獲得しました。春はゆったりと過ぎてゆきます。作者は散り桜の舞う花の下で、その貴重な刻を味わっています。過ぎ去ればまた懐かしい時間でもあるかも知れません。天賞推挙のコメントには「老後は、せめてこの句のように刻を忘れて、ゆっくりと散りゆく桜を眺めたい」とありました。

次に晶如さんの句「山桜まだ見残こせしわが山河」が、天賞一つを獲得しました。この句は山桜のことなど、一見、鑑賞の切り口が多い句ですが、真に汲み取らねばならないのは「見残してきたわが山河、わが人生への悔悟」についてではないでしょうか。見過ごしてきたものを通して、これからの生き方まで示唆しているように思います。次に歌多音さんの句「止み給へ花散らす雨今日もまた」が、天賞一つを獲得しました。今月の上旬にも雨どころか雪の降った日が、連日続きました。天賞推挙のコメントにも「桜の季節には必ず風雨が来て、散らしてしまう」とありましたが、今月の上旬は、風雨どころか雪まで連日混ぜてくれました。毎年、心配させられますね。

次に多佳さんの句「もう少し話をしたし夕桜」が、天賞一つを獲得しました。お話し相手は何方だったのでしょうか。青春時代の思い出であるかも知れません。中七の「話をしたし」が、印象的な句になりました。次に柴楽さんの句「修道の門を彩る桜花」が、天賞一つを獲得しました。門一つ入るか、出るかで決まる修道の厳しさ、その門の傍らに華やかに咲く桜花、選者はその対比の面白さに一票を投じました。次に荻女さんの句「桜しべ降りつぐ幹の乾きみて」も、天賞一つを獲得しました。天賞推挙のコメントにありますように、降りしきる桜しべに着目し、それを乾いた黒い幹に対比させたことで、この句は生きてきたという観察力が評価されました。

天賞は付きませんでしたでしたが、童岳さんの句「若木には負けじと老いし桜咲く」が、最多得票賞（☆印）の栄に輝きました。わが身を振り返り、老いの頑張りに一票を投じられた方が多かったようです。

兼題2では、明峰さんの句「囀りやひとりの刻を野に過ごす」が、天賞一つを獲得しました。明峰さんは兼題1でも「刻」を「とき」と読ませ、句に詠み込んでおられます。この句は、ひとり野に過ごし、鳥のさえずりを聞かれた至福の刻として詠まれました。次に蒼樹さんの句「さえずりや散歩日和と告げる朝」が、天賞は付きませんでしたでしたが、最多得票賞（☆印）を獲得されました。朝、爽やかに囀る鳥の声、「今日は散歩日和だな」と思われた晴れやかなひと時ではないでしょうか。多くの選者からの共感の一票を獲得されました。

兼題3では、創風さんの句「車椅子笑顔を乗せて花見かな」が、天賞三つを獲得しました。花見という心弾むひと時、車椅子に笑顔が綻びます。通り合わせただけで「良かったですね」と、笑顔がこぼれるのではないのでしょうか。天賞推挙のコメントにも「清々しい、楽しそう、歓び」と、表現されていました。次に明峰さんの句「好きな道好きに歩いて春探す」が、天賞二つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。詠まれた上五、中七の「好き

な道好きに歩いて」が、圧倒的な好感を得られたと思います。「飄々と生きる」とでも言いませんか。人生はかくのごとくありがたいものです。

次に晶如さんの句「春嵐ひと葉を窓に貼り付けて」が、天賞一つを獲得しました。春嵐の凄さを詠まれた句ですが、嵐の中で窓に張り付いた一葉を詠まれました。「あらっ」という可笑しみとは別に、嵐の凄さに「大丈夫かな」と、不安が過る景まで見えて来るようです。次に栄女さんの句「新幹線春色の靄突き抜けり」が、天賞一つを獲得しました。読者は中七の「春色の靄」に、琴線を揺さぶられたのではないのでしょうか。春色は先月の句会にも登場しましたが、春色の靄を突き抜ける新幹線のスピード、切れの良い句になりました。

次に蒼樹さんの句「郁子の花日ごとに命増すごとし」が、天賞一つを獲得しました。郁子の花を調べました。表面が白く、薄紅紫色の六弁の花です。「トキワアケビ」と言われるアケビと同じような実をつける花だそうです。この句は天賞推挙のコメントにも書きましたように、景の一瞬が切り取られた句ではなく、毎日の観察から生まれた句だと思います。もう一つ、月草さんの句「タンポポの真似して仰ぐ空真青」が、天賞一つを獲得しました。地べたにくっつくように咲くタンポポを見ることがありますが、じっと空を見続ける、そんなタンポポを見て詠まれた句でしょう。天賞推挙のコメントでは、下五に「空真青」と体言止めにしたことで、余韻が一層深くなったとありました。

冒頭でも書きましたが、「天賞推挙のコメント」と、「ひと言」の充実で、これからも一層コミュニケーションが活発になることを願っております。平素気をつけている「だから俳句」（だからこうなる、だから綺麗だと、理由をつける句）なのですが、すぐ説明をしてしまいます。送り仮名の失敗、これは例えば、今回の「さえずり」は、「さえずり」ではなく、文語体では「さへづり」です。もう一度、気合を入れ直して気をつけることにします。そして、ずぼらをして怠ってきました「もの見えたる光、消えぬうちに言ひ止むべし」を、実行することにします。間違っても「言葉先行の句」は、作らないようにします。

末尾になり誠に恐縮千万ですが、今月も原晶如さま、森田多佳さま、奥田和感さま、お三方さまには大変お世話になりました。有難うございます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

それではまた来月、皆さんお元気にお過ごし下さい。俳句を楽しみましょう。

(白然記)